

大賞

「大切な、命」

横浜創英高等学校 二年 山口 茉莉

現代文の授業で「高瀬舟」を読んだ時、長尾先生の提案で「安楽死に賛成か反対か」というテーマでディベートを行いました。

私は安楽死に賛成でしたが、反対チームとしてディベートに参加することになりました。相手チームは調べてきた資料を元に確かな主張をしていて、私も共感したり納得したりしました。ですが、「もし家族にもう治ることのない病気を持った人がいたとしたら、経済的にも、精神的にも、いつまで看病して、支え続けることができますか？ 延命治療は経済的にも精神的にも家族の負担になりませんか？」という問いかけをされた時、思わず涙があふれてきてしまいました。

私の姉は、脳に障がいをもっています。残念ながら、今の医療技術では治る見込みはありません。しかし、たとえ医者に治らないと言われても、希望を持ち、支え続けるのが家族

という存在なのではないでしょうか？ 私たち家族は、姉の看病や治療費を負担に思ったことはありません。負担だから治療をやめて、命を絶ってしまおうと思ったこともありませんが、今はまだ、短い面会時間の間に話しかけたり、一緒に食事をしたりすることしかできていませんが、私が大人になったら、これまでできなかった経済的なサポートもしたいと思っています。

人の命や死には、資料では説明できない、もっと大事なものがつまっているのではないのでしょうか。それは、愛や悲しみ、希望……。 「安楽死」などと難しく考えなくてもいい。まずは命の大切さや、死という言葉の重みを感じるだけでもいいと思います。ディベートを通して、姉への強い思いを再認識するとともに、さらに命一つの重みについて考えさせられました。これはきっと、家族だから。という一言で終わるものではありません。友達、先生、世界のどこかで姉と同じように苦しんでいる人、全員に言えることです。みんなにも気付いてほしいです。命の、大切さに。

教育委員会委員長賞

「命との対峙」

県立相模原中等教育学校 四年 糸井 大揮

前に並べられた数センチから五十センチにかけての大きささまざまな胎児の人形に目を移すと、実習生の方による解説が始まりました。見慣れた大きさの赤ちゃんは妊娠十ヶ月程度、人が動物かの見分けも難しい小さな赤ちゃんは命が宿つてすぐである。前々から多少は知識として分かっただけでしたが、実際に大きさを目にする、こんなに小さな頃からこんなに大きくなるまでおなかの中で育ててくれたんだな、と普段の生活ではあまり抱かないたいぐいの母への感謝を感じました。

机の上に胎児と新生児の人形が置かれ、一グループに一人の実習生の方と一緒に次の体験をしました。胎児の手足の動きを再現した人形を胎盤に見立てた袋に入れおなかに抱きかかえることで、母親の気持ちを経験できるということでしたが、僕は男子だから言葉にしにくい不思議な気持ちになりました。

僕は子供が好きなので新生児の人形は楽に抱っこすることができました。周りの実習生の方々はもちろん子供が好きだから助産師を目指しているのだろうし、これからは多くの子供とふれ合えるのだろうと思い、「楽しそうですね。」と話しかけました。すると少し意外な返事がかえってきました。

彼女は「はい。幸せです。でも人の命のはじまりをお手伝いさせていただく仕事なので、楽しいとは少し違います。分かっていただけですか？」と言いました。僕はふと従兄弟が生まれ時の事を思い出しました。相当の難産で、生まれた直後に障害が発覚し、顔を見る間もなく緊迫した空気の中救急車で運ばれました。ショックを受けている家族にそつと話しかけてくれたのは、助産師の方でした。

あのような命との対峙をしていくであろう実習生の方々がなんだかとてもしっかりとして見えました。そのように考えていると、僕がこれから先、出会うであろう生命の誕生が輝かしいものに見え、うれしくなりました。

神奈川新聞社賞

「授業から学んだいのちのリレー」

県立麻生総合高等学校 三年 秋山 葉月

「あつヨトウムシにナスが食べられている。」「思わず声をあげた「園芸とガーデニングB」の授業。前の授業ではいなかっただのに。」

私は入学当初は調理師になろうと考え、二年次では食材になる野菜の作り方を学ぼうと「園芸とガーデニングA」を学習しました。

私は少しずつ、野菜や草花の栽培に興味をもつようになり、今年「園芸とガーデニングB」を学習しています。授業では「自ら野菜栽培を計画して栽培管理」をしています。

計画を立て、小さな苗を先生から頂き、私の手で植えつけ、水や肥料をあげ、育てていると、害虫が大切なナスを食べていました。授業では農薬を極力使わず栽培をしているので、手で捕殺するしかありません。

私はナスのために、害虫が一生懸命に続ける「いのちのリ

レー」をさえぎり、畑全体から、「害虫のいのち」をいただかなければ、立派な野菜を収穫できないと痛感しました。

一匹見つけて作業するたびに、ナスのために「ごめんなさい。」とつぶやきました。

この授業から、すべての害虫のいのちをいただき、小さな苗から立派なナスを収穫した時の大きな感動は忘れられません。このことは授業を受けた友人たちも思った事実でした。

さらに、多くのいのちでできているナスを家庭に持ち帰り食べてみると、さらに違った感覚がしました。それは私のナスを食べて「おいしい」と皆が笑顔になったことです。害虫のいのちをいただき育てた野菜は、人の生きる源になり、温かな家族の時間にもなる貴重な存在なのだと思えました。私はこの思いを多くの人に伝えられる就職先を希望し、「園芸店」に内定を頂きました。

私が授業で学んだ野菜栽培を、今度は野菜を育てるお客様に、「いのちをいただく意味や野菜を育て食べる感謝の心」をもっていただけるように、微弱ではありますが、私が「いのちのリレー」のメッセージとなり、お客様への接客にこころがけていきます。

テレビ神奈川賞

「『命』を学習して」

大井町立大井小学校 五年 荘司 渚

私には命についてこんな経験があります。私が四年生のとき、おばあちゃんが亡くなりました。

おばあちゃんが亡くなったと聞いてすぐに病院へ向かいました。私はずっと車の中で静かに泣いていました。おばあちゃんが亡くなるなんて考えていなかったからです。車の中でおばあちゃんとの思い出を思い出すと、涙がとまりませんでした。私はずっと泣いていると、お母さんが私のことをぎゅつとだきしめて、

「最後におばあちゃんの頭をなでてあげな。」
と言いました。

病院に着いて私はそつと頭をなでました。頭をなでると、おばあちゃんが「ありがとう。」と言ってくれてるような気がしました。

身近な人が、亡くなるということは私の中で初めての経験

でどうしたらいいのかずっとわかりませんでした。すなおに悲しめばいいのか、最後に笑ってあげた方がいいのか考えました。

おばあちゃんとの別れから半年、道徳で命の授業がありました。そこで出会ったのが命の詩です。その詩の中にある「かん電池はかえられるけど、人の命はかえられない」という言葉が心にひびきました。一生けん命に病氣とたたかっても亡くなってしまふことがあります。命はかえることができません、この詩のように、ずっとみんなの心に残ることができるのです。

おばあちゃんの別れと道徳の授業で、私の気持ちが変わりました。今までふつうにすごしていたのが、毎日お母さんやお父さんといられる幸せを考えるようになりました。そして家族というものをもう一度考えました。遠くはなれてしまってもおばあちゃん是我的大事な家族です。

これから命、家族を大切に一生けん命生きていこうと思います。

神奈川県PTA協議会会長賞

「がんばったね。やさいのオクラちゃん」

横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉小学校

二年 西岡 花

わたしは、生かつかで、オクラをそだてることになりました。た。

さいしょ、やさいをそだてる前は、とてもきんちょうしていました。なぜなら、うまくそだてられるかしんぱいだったからです。

一つ目のオクラのなえは、しばらくお世話をしていただけ、かれてしまい、じ分も元気がなくなりました。でも、二つ目のオクラのなえは、いっしょうけんめいお世話をしたので、なえは、元気百パーセントで、グングン大きくなりました。はじめてクリーム色の花がさいたときは、とてもうれしくなり、そして、はじめてみげできたときは、さわるとふわふわのけがきもちよかったです。一本だけ先がおれてしまったけ

ど、ハンカチにつつんで、大じにもってかえりました。家にかえると、みんなで、すこしずつたべました。とてもおいしかったです。

やさいをそだててみて、そだてるのは、見ているよりかんたんではないなと思いました。

なぜなら、水をやらないとかれてしまうし、虫がついていたら、はしでトールで虫をとらなければなりません。風がつよい日は、きょうしつに、ひなんさせないと、うえきばちがたおれてしまうし、大雨のときは、おきがさをしちゅうにひっかけて、ひもでむすんであげないといけないし、それはそれでとてもむずかしくて、たいへんでした。だから、みげできるまでは、お世話するのが、とてもたいへんだと思いました。やさいをそだてている人は、とてもすごいなと思いました。しょくぶつは、しゃべれないし、うごけないので、赤ちゃんをそだてるのと同じだねと、おかあさんと話をしました。オクラは、まだいきていて、大きな大きなみをつけています。たねをとって、らい年の五月に、またうえたいです。

優秀賞

「1200億分の1の命」

座間市立相武台東小学校 五年 丸 陶子

みちよ先生の話聞いて、私は、私なりに、自信を持てるようになりました。なぜかという、東大に受かるかくりつが500分の1で、プロサッカー選手が、1000分の1で、プロ野球選手が、2500分の1で、年末ジャンボの宝くじが、1000万分の1。そして、私たちが、生まれてくる「かくりつ」、1200億分の1。そして「君たちは、エリート達なんだよ。」といわれて、自信がきました。みちよ先生は、たぶん、こーいいたかつたんだと思います。「1200億分の1の大切な命。それが君たちなんだよ。」と。

いつも、家に帰ると、「大切なお母さん」がいます。学校に行けるのも、サッカーを、楽しくできるのも、私を産んでくれた、「お母さん」のおかげです。お姉ちゃんが、部活でつかれて帰ってきます。そんなお姉ちゃんが私は大好き。宿題でわからなかったことを分かりやすく教えてくれたり、家

事も、進んでお手伝いしてくれます。私にすごくやさしく接してくれます。これから先、お姉ちゃんを見ならって、生きていきたいです。

このように、みんなのささえがあって、生きられています。「私は、すごく幸せだ。1200億分1の命なんだ。」と、初めて思いました。

10月6日に、本当の感謝の気持ちを初めてお母さんとお姉ちゃんに伝えられました。

「ありがとう」って。

優秀賞

「ありがとう、私の家族」

川崎市立西有馬小学校 六年 野村 愛莉

私は、プレシヤスライフの方々に心の朗読会というものを聞かせて頂きました。話の中には、感動するお話や、悲しくなるお話、心が明るくなるお話があり、少し感動して泣いている人もいました。私は心の朗読が終わった後に一気に自分の今の本当の気持ちがあふれてきました。特に私が思ったことは、命の大切さそして、家族の本当の意味です。

私は前から命と家族がどのくらい大切な存在なのか知っているつもりでした。でも私が思っていたことは少しちがっていました。そのちがいをプレシヤスライフの方々に教えて頂くことが出来ました。

今自分がこの世に生まれ、学校に通えていること、ご飯を食べられていること、そしてこの文を書けていること、それを全てお母さんのおかげだとかんちがいしていました。でも本当は、私のお母さんもおばあちゃんから生まれてきてい

る。そのおばあちゃんもひいおばあちゃんから。と、命はつながっていたのです。なので今私がこうして居られるのはお母さんのお母さん、おばあちゃんのおばあちゃん、そしてもっともつと昔のおかげだと気づかせて頂きました。

今まで家族というのは一緒に暮らしている人のことをいうのかと思っていたけれど本当は、私にかげがない一つの命をくれた人たち全ての人のことをいうのだと私は思いました。この朗読会がなければ家族の意味をこのように考えることが出来ませんでした。

「家族」という本当の意味を気づかせてくれた、命の大切さを教えてくれた、プレシヤスライフの方々がとうございしました。そして、私にかげがない一つの命をくれた「家族」、ありがとう。

優秀賞

「やさしいひまわり」

箱根町立仙石原小学校 三年 内堀 夏華

わたしは、理科の学習で、ひまわりをそだてました。水をまき、めがでてきたときは、「ちゃんとそだつかなあ。」と、思っで毎日かんさつをしました。どんどん日にちがたつて、ひまわりの花がさきました。お休みのあと、きゆうに花がさいたので、ものすごくびっくりしました。

ひまわりは、大きくなるにつれて、根っこも大きくなつてきて土からはみだしても元気だったので、なぜかなあと思ひました。わたしたちのそだてたひまわりはびょう気に、かかつてもがんばつてそだつてくれたのでうれしかったです。台風のとさにも、もちこたえたから、やっぱりひまわりは、生きる力がすごいんだなあと思ひました。

ひまわりはそだつていくうちに、くきがたおれてきて花のほうを見たら、たねができていました。たねのおもさのせいで、くきが曲がつちやつたのです。たねとりをして、たねの

数をかぞえました。まいたときは一つぶなのに千つぶいじょうのたねがとれました。ひまわりは、いのちをふやす花だと思ひました。

わたしたちは、ひまわりパワーを分けてあげようと、ろう人ホームに行きました。ひまわりのことをしつてもらうために、ひまわりについて、いろいろ調べたりもしました。ひまわりのたねを入れたおまもりを作り、プレゼントすると、とてもよろこんでくれました。そうしたら、「またこんども来てね。」と言つてくれました。とてもうれしかったです。

ひまわりは、ふしぎがいっぱいつまっている花です。くきにはえている毛は、何のためにあるのかと話し合ひました。ひまわりは、太陽の花でもあるから人の心をあつくしちゃうのかなあ。みんなをあつくしちゃうひまわり、わたしは大好きです。ひまわりのことをべんきょうして、わたしは、ひまわりのいのちだけじゃなく、どう物のいのち、しょく物のいのちを大切にしようと思ひました。もちろんわたしや友だちのいのちも、大切にします。

優秀賞

「いのちを大切にする様々なカタチ」

横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校

二年 大久保 なつみ

「これからのいのちの授業を始めます。」

そう教室に響いたとき、私の中である疑問がうずまいていた。

「本当に命を大切にするってどういうことだろう。」

いのちの大切さについて、私はこれまで、小学校の道徳などで学んできた。だから中学生になり、「いのちを大切にするカタチ」という自分なりの視点で、「いのちをいただく」という朗読に耳を傾けた。その中で、家族に愛されているみーちゃんという牛を、坂本さんは抵抗があらながらも命を奪っていく、という場面があった。牛はそのとき涙を流したという。そのとき、私の心の中で何かグツと感じたものがあった。

今まで何も考えずに、ただ「美味しい!」と思いながら大好きなお肉を食べてきた。そんな自分に怒りがこみ上げてき

た。こんなにも尊い命を頂いていたのに、そんな事実を受け流していたからだ。今回「いのちの授業」を受け、人間だけでなく、身近に溢れているものの先には必ず命があるのだという事に気づかされた。「いのち」に感謝の気持ちを忘れないというのが、命を頂いている側にとっても忘れてはならないことなのではないか。そして、いのちを大切にするもう一つのカタチとして、一番身近な命である自分自身と向き合い、両親から授かった「いのち」を大切にしていこう。そうすることで、人と人が、より互いに尊重し合えるのではないかと考えた。

「本当に命を大切にすること」とは、様々なカタチがあるのかもしれない。だからなおさら一人一人が意識して毎日を過ごすことが、私たちが社会に出ていく上でも大切だと思う。そして、命について今回学んだことをこれからも忘れず、多くの人に伝えていきたいと強く感じた。

優秀賞

「生きていくことの大切さ」

横浜市立東山田中学校 二年 原田 加紗音

「生まれてきてくれただけで100点満点だよ。」この言葉は、いのちの授業をしてくださった青木先生が最後に言った言葉。私はこの言葉を聞いてたくさんの方が頭によぎった。自分自身がこの世にいること。当たり前のことだと思っていたけれど、自分だけかもしれない。私には帰るところがあつて、「ただいま」というと「おかえり」といつてくれる人がいる。そして、おいしいご飯やお弁当が食べられる。当たり前前に毎日笑顔があふれている。自分にとって当たり前だと思うことはたくさんある。でも、これらのことが当たり前じゃない人もいる。だからこそ今、私が当たり前にできていることは素晴らしいことなんだと思い、感謝しなければいけない。そして私は選ばれてきた、大事ないのちなのだ。おかあさんが10カ月もの間、お腹の中で大切に育ててくれたからここにいるんだ。おかあさんは私のいのちの元なんだ。そ

う考えると、「おかあさん」ってすごい存在なんだ。と思った。おかあさんは私以上に人生経験が長い分、なにかも知っていて、辛いことも私たちより何倍も乗り越えてきている。私たちより年上の人はなんだって乗り越えてきているのだから、だれだって辛いことは乗り越えられる。そう考えた。私は毎日毎日楽しいけれど、そうではない人だって世の中にいる。自ら大事ないのちをたつてしまう人、なんらかの理由があつて、いのちをたたれてしまう人。世の中にはいろんな理由で亡くなってしまふ人がたくさんいる。夕方、ニュースを見ると、毎日のように悪いニュースをやっている。悪いニュースがない日が1日だけでもあつてもいいんじゃないかなと思う。

私は、世界中の人たちに、今、自分がここにいることを幸せに思ってもらい、自らのちをたつ人がなくなる日を待ち望んでいる事を私自身で伝えてみたい。